

連続する問題*目次

- 1 宝くじ的あまりに宝くじ的な 13
- 2 「遊びがあつて不可」再論 25
- 3 助さん格さんの、あまりに…… 37
- 4 「歴史の事実」と拉致問題——謝罪をめぐる 50
- 5 連続する問題、その現在 63
- 6 憲法に連続する問題 74
- 7 終戦記念日に連続する問題 85

	8	朝鮮人虐殺八十年	96
	9	善をなさんと欲する我に悪あり	107
	10	「地上の樂園」再考	118
	11	ソヴィエトの絵本——中野重治とバフチンのあいだで	130
	12	人文上の権利	142
	13	憲法以前のところ	154
	14	一九四六年十一月三日	166
	15	『五勺の酒』の現在	177
	16	憲法第一条とセクシュアリティ	188
	17	続・『五勺の酒』の現在	200
	18	アンドレア・イエーツ事件のこと	212
	19	モーセがパレスチナ人だったとすれば……	224
20		もう一ヶ月もつらいならフロイトへ	236

	21	明日の世界？	247
22		精子そのものに影が射している	258
23		二十二周遅れで読む『シネマ』	269
24		改行の可・不可	281
25		じゃ、悪魔はいるのか？	293
26		チベットにおける「日常生活の宗教」	304
27		鹿野武一をめぐる	316

補論		切断のための諸断片	329
----	--	-----------	-----

あとがき 397

「連続する問題」関連年表 i

まえがき

本書は「新潮」に連載された「クロスロード」(二〇〇二年三、六、九、十二月号、二〇〇三年四、七、十月号)および「連続するコラム」(二〇〇四年号〜二〇〇八年の各一、四、七、十月号)の二十七の雑文に補論を添えて単行本化したものである。

もともとは当時「新潮」の編集担当だった風元正氏が企画した「クロスロード」という枠で西谷修氏、丹生谷貴志氏と私の三人のローテーションで書き始めた雑報である。特にリレーを意識する必要はなく、また共通のコンセプトや方向性があるわけでもなく、各々が、たとえば電車の中刷り広告を見て思ったり感じたりしたことをきっかけに各回、読み切りで、四百字詰原稿用紙二十枚ほど毎月交代で好きなように書き綴ればよいとの話。ならば、と気軽に引き受けたものの、実際に当番が回って来ると何を書けばいいのかよくわからない。言われたとおり、第一回は通勤電車の中でたまたま年末ジャンボ宝くじの広告が眼に入ったから宝くじについて書いたのだが(「宝くじ的あまりに宝くじ的な」、実際にやってみると、こういう話題で二〇枚も書くというのはいずれぶん骨の折れる仕事で、安易に連載を引き受けたことを後悔した)。

三回目の「助さん格さんの、あまりに……」(二〇〇二年九月号)までは、眼に飛び込んで来たものをきっかけに行き当たりばったりに書いていたが、いわゆる拉致問題で日本中が騒然とする中、この問題を取りあげた四回目の『歴史の事実』と拉致問題——謝罪をめぐる(二〇〇二年十二月号)あたりから一定の方向を向き始めたように思う。そのことは、五回目の「連続する問題、その現在」(二〇〇三

年四月号)から毎回コラムの終わりに原稿を書き終えた日付を入れるようになっていたことにもあらわれている(一回目から四回目、および八回目の終わりに年月のみが括弧の中に記されているのは、巻末の関連年表と照合しやすいよう本書に収めるにあたって後で書き入れたもの)。晩年の中野重治の言った「連続する問題」が、眼前に暗礁として生々しく感じられるようになって来たのだ。

八回目の「朝鮮人虐殺八十年」(二〇〇四年一月号)の始めにもふれているように、中野自身が「連続する問題」というタイトルで「日本共産党の動きに関することがら」について短い文章を書いている。しかし、本書では、それと無関係ではもちろんないが、「連続する問題」という言葉をもう少し広い意味で使っている。それは、ひとくちに言って、近代日本の視野における朝鮮の位置づけをめぐって構造的に生じる奇妙な盲目性の問題である。日本は国内の「近代化」とほぼ時を同じくして(巻末に付した関連年表を参照して欲しい)朝鮮の植民地化に向けて動き、現実に朝鮮を植民地化していたため、同じ東アジアに対する加害の認識でも、朝鮮に対する場合、たとえば中国に対するのとは微妙に違った不透明な認識になる。端的には、日本は敵国だった中国には戦争で敗けたが、植民地だった朝鮮に関しては敗けたという意識を持っていないということがある。しかも、敗戦後、朝鮮そのものが分断された。このため、いっそうに位置づけがボヤけた。だから、同じ反日でも中国のそれ(たとえば尖閣諸島/魚釣島をめぐる反日)と韓国(たとえば竹島/独島をめぐる反日)とでは、日本にとってそれが意味するところは、したがって日本の対応も、微妙に異なって来る。むしろ、近代日本の視野において朝鮮が見えなくなるなどない。しかし、その半身は死角へとズレ込みやすく、いわば無意識というモードでのみ知られているという症候的な在り方をするようになっていく。この奇妙な盲目性は、日本帝国主義にあらわれているのみならず、第二次世界大戦における東アジアに対する日本の加害を強調し朝鮮の解放を

主張する日本共産党の歴史認識をも浸食している、というのが中野の批判だった。つまり、保守サイドに症状としてあらわれる「問題」が革新サイドにも、いわばヨコに「連続」してあらわれるのだ。晩年の中野はこの「連続する問題」の批判的吟味によって「日本の革命運動の伝統の革命的批判」に具体的に着手したのであるが、中野によれば、問題の根は深く日韓議定書（一九〇四）まで遡る。構造的な盲目性はそこからずっと現在に至るまで、いわばタテに連続している。

以上が、本書が四回目の『歴史の事実』と拉致問題——謝罪をめぐって』以降に意識的に取り組んだ「連続する問題」の骨子である。

風元氏の移動に伴い「クロスロード」という枠での寄稿は七回目の「終戦記念日に連続する問題」（二〇〇三年十月号）で終わった。しかし、奇妙なもので、この頃には眼前にあるこの「連続する問題」についてももう少し考えたいと思うようになっていた。だから、新しく「新潮」編集長に就任した矢野優氏にそう申し出、「クロスロード」終了後も引き続き三ヶ月に一度、年四回というペースで書かせてもらうことにした。「クロスロード」から連続して書くという意味で、また一回一回は読み切りであって続きものではないながら、しかし、毎回、何らかのかたちで中野重治と「連続する問題」を扱っている点では連続しているという意味で「連続するコラム」という枠を設けてもらって、二〇〇四年一月号から二〇〇八年十月号まで五年間、計二十回、書いた。

この五年間の連載は難渋していたドストエフスキーに関する不定期連載と並行していたため、全体にその影が落ちている。むしろ、『歴史の事実』と拉致問題——謝罪をめぐって』から「精子そのものに影が射している」（二〇〇七年七月号）までは「連続する問題」と中野重治とが関係していないわけではない。だが、その細い脈も「二十二周遅れで読む『シネマ』（二〇〇七年十月号）あたりから途絶えて脱

線している。だから、唐突ながら、「鹿野武一をめぐって」（二〇〇八年十月号）を以て「連続するコラム」の連載を打ち切ってドストエフスキー論に専念することにした。

以上のような次第で書いた計二十七回の雑文なので、初回から最終回まで一貫した背骨が通っているわけではない。しかし、嫌々ながら通読してみても少し考え直した。まとまりに欠け、連続性も中途半端であるという印象は変らないのだが、それとは違った意味で内的な連続性が潜在しているように思えたからだ。それは「今、ここ」への連続性であると同時に、今、僕が考えようとしていること、しかしなかなか考えられずにいることへ直接、連続して来るものでもある、と。

その内的連続性の輪郭に関しては、最後に補論を添えて粗描する。また、個々の雑文が書かれた当時の空気は近い過去ゆえにすでに忘れられているだろうから、それを多少とも思い出せるよう執筆当時の出来事を列記した関連年表を巻末に添える。この年表は、個々の雑文が参照している歴史的出来事を記載しているだけではなく、内的連続性のペースペクティヴを明らかにするために一八七一年まで遡行的に延長して作成した。もとより網羅的なものではなく、僕の現在の関心に引き寄せた偏頗なものだが、併せ参照して頂けると幸いである。

とは言え、以上のようなことは「連続する問題」が、著者である僕自身にとって持つ意味を出ない。もともとが読切りの雑文である。読者は著者にとっての意味などにとらわれることなく、手当たり次第、好きな所から自由に入ることができはずだ。言うまでもなく、そう読んで頂いて大いに結構なのだ。

連続する問題

凡例

本文中の「 」内の表記は、本書刊行に際して書き加えた補記を示す。

引用文中の「 」内の表記は、引用者による注を示す。

単行本としてまとめるにあたり、中野重治作品の引用は第二次『中野重治全集』（全二十八巻、筑摩書房）を参照した。またその他、引用文中の

旧字旧仮名遣いは新字旧仮名遣いに統一して表記した。

1 宝くじ的あまりに宝くじ的な

昨年末（二〇〇一年）のジャンボ宝くじは、高額当選者が前年の三倍という触れ込みだった。ふだん買わないのにたまたま思いつきで買うような男に限って高額当選について奇妙な「確信」にとりつかれるらしい。すでに当たった気になって、アフガニスタンに寄付してやろうなどと、いい気な皮算用をした。慈善心からではない。構造が変換可能であると考えてもいなくせにあれこれ情勢を分析しては自説の鋭さを誇っている諸々の解釈、悲観的な顔して根本的にお気楽な解釈ばかりテレビや新聞・雑誌で聞かされて、いい加減うんざりしていたので、それに対する当てつけからだ。そんなものよりも、寄付して学校でも建てたほうが現実的に意味があるではないか、と。しかし、金を投ずるのは簡単だが、あそこにもっとうな学校を建てさせるのは並み大抵のことでない、これは厄介な事になったぞと考え込むに到っては、もはや「夢」ではない。妄想である。宝くじについては、確率論と社会学に基づいてその愚昧を指摘する啓蒙家の良識的な意見があり、いずれももっともな見解で、なるほど馬鹿をみたわけだといちいちその理屈に感心するのだが、当選に被害妄想まで抱く馬鹿には馬鹿の「確信」があつて、啓蒙的な意見に感心はしても承服はしない。ましてやご高説どおり高額当選者になりそこねてしまつては、ひと理屈こねても腑に落としくないのである。

——そもそも、年末ジャンボ宝くじで一等に当たるのは、確率論的には、一人の人間が一年間に交通事故で死ぬより八百倍以上難しいことなのだ。

——ということは、一人の人間が一年間に交通事故で八百回以上死ぬよりも難しいということか。だが、八百回以上死んだらどんな気持ちがかかるか味わってみたくてしかたがない馬鹿はどうすればいい。

——馬鹿は死ななきゃ治らないと言うが、宝くじなどやる馬鹿は一回くらい死んだだけでは駄目で八百回以上死んで治すほかないだろう。

——八百回以上死んでみて初めて治るような病気なら、それは人に一生を八百回以上、生きさせるに足りる有り難い病気だとどうして考えない。

——サイコロを振ってみろ。一の目がそう簡単に八回連続して出るか。高額当選者が前年の三倍と言っても、二億円ないし一億円が当たる確率は、サイコロを振って一の目が八回連続して出る確率とそう変らないのだ。

——ご高説どおり八百回以上死んでから治ることにしようと思腹を決めている馬鹿には、八回くらいなら一の目が連続して出そうな気がするものなのだ。

——そういう気がするとは、心理的な錯覚だと自ら認めてはいるわけだ。

——心理的な錯覚というが、では、確率を計算して百六十七万九千六百六十六分の一の蓋然性だと聞かされれば、それはもうありえないことだと思う、そのことは心理的な錯覚ではないのか。生命が何十億年も前に地上に出現したのは、一度しか生じない決定的な出来事で、その確率は「ほとんどゼロ」

だった。「宇宙」は生命をはらんでいなかったし、生物圏は人間をはらんでいなかった。われわれの当りクジはモンテ・カルロの賭博場であつたようなものである。そこで十億フランの当りを手にして茫然としている人間のよう、われわれが自分自身の異様さとまどつているとしても、なんら驚くにはあたらないのである」(ジャック・モノー『偶然と必然』渡辺格・村上光彦訳)。「心理的な錯覚」と言うのならそれでもいい。だが、心理的にみれば錯覚としか思えないような出来事なしに生命は発生しなかつたということはどうか考へる。

——宝くじに外れたことを正当化するのに、生命発生の確率まで持ち出す「自分自身の異様さ」にまづとまどつて欲しいものだ。

——一の目が八回連続して出るくらいのはありえぬことではない、と言いたいだだけだ。ドストエフスキーというルーレット狂はそれくらいの「確信」は持っていた。彼の描いた賭博者が運命の夜にルーレットで連勝して、さらにカードで十五回連続して赤に賭けて勝ち続けたその確率は、一の目が八回連続して出る確率をはるかに上回るはずだ。

——生物学の次は文学。だが、小説の中なら何でも起こりうる。

——小説の、何でも起こりうるという条件ではなく、そんな連勝がありうると確信していた小説家の「確信」のほうを問題にしているのだ。「だが、その晩(わたしはその晩のことを終生忘れないだろう)、わたしには奇蹟的な出来事が起つたのだ。それは算数で完全に証明されるにせよ、それでもやはり、わたしにとってはいまだになお奇蹟的である。それにしてもなぜ、いったいどうして、そんな確信があつたころ、あんなに深くしっかりとわたしの内に根づいていたのだろうか、それももうあ

んなに以前から？ たしかに、わたしはそのことを——くり返して言うが——何回かに一回起りうる偶然としてではなく、絶対に起らぬはずのない何かとして、考えていたのだった」（ドストエフスキー『賭博者』原卓也訳）。この「確信」はどこから来るのか。

——「心理的な錯覚」以外のどこでもない。

——心理的にはちがいない。だが、この錯覚は、心の思うがままに、持ったり持たなかったりできるような恣意的な代物ではない。では、持とうとして持てるわけではなく、捨てようとして捨てられるわけではないこの錯覚はどこから来るか。蓋然性が「ほとんどゼロ」であっても、起こるときには「何回かに一回起りうる偶然としてではなく、絶対に起らぬはずのない何かとして」起こる、一回的で唯一無二の出来事に対する直覚、すなわち確率論的なデータが抹殺してしまうあの手触りからだ。

だからこそ、かの賭博者はインテリとして確率論を重々知りながら、それを一向に信用しようとはしないのだ。「もともと確率の計算なぞかなり小さな意味しかなく、多くの賭博狂が付している重要さをまったく持っていないような気がした。そういう連中はグラフにした紙を手にして陣取り、当りを書きこんだり、計算したり、チャンスを割りだしたり、予想したりした末に賭けるのだが、計算なしに勝負しているわれわれ凡人とまったく同じように負けるのである。しかし、その代りにわたしは、おそらく確実と思われる一つの結論をひきだした。実際、偶然のチャンスの流れの中に、一つの体系とこそ言わぬまでも、なにか一種の順序のようなものがあるのだ」（同前）。

——確率論を信用しないのは賭博者の勝手だが、「なにか一種の順序のようなもの」など「心理的な錯覚」と言って悪ければ「統計上のゆらぎ」と言うほかない。だから、より大きなスパンでは必ず

揺り戻されてツキは相殺される。じっさい、この賭博者は、あの運命的な夜には大きなゆらぎに後押しされてツキにツキまわったかもしれないが、それもせいぜい「一時間半か二時間半」で、やがて揺り戻され、「統計上のゆらぎ」に翻弄されたあげくついには破局を見なければならなかった。それが、確率論を馬鹿にした賭博者に共通の運命なのだ。

——ルーレットにおいて立て続けにゼロに賭けて実際にゼロが立て続けに出るのに理由などない。だが、賭博者は理由があるうとなかろうと、その神秘的な僥倖に魅せられてゼロに賭けずにはいないのだ。

——ただし、その「僥倖」とやらは永続しない。運に見放されて最後には必ず敗ける、と言っているのだ。

——勝敗を考えたら「意味」はない。しかし、ルーレットにおいてゼロに賭け続けて実際にゼロが出続けるというこの「無意味」は、勝ち負けにかかわらず、それ自体で驚くべきことではないか。意味などありはしないが、しかしこの無意味がどれだけ意味深いか、心理的あるいは統計的な意味などよりもその無意味がどれほど自分をとらえてはなさないか、賭博者はよく知っているはずだ。「心理的な錯覚」かもしれない。「なにか一種の順序のようなもの」も「統計上の揺らぎ」かもしれない。しかし、それが人をして一生を八百回以上、生きさせるに足るほどのものなら、「心理的な錯覚」や「統計上のゆらぎ」を軽蔑する理由がどこにある。冗談を言っているのではない。ドストエフスキーのような賭博者が不死を信じるとはそういうことだったにちがいないのだ。

——文学に話を持ち込んで偶然性の幻惑を神秘化しようとしても無駄だ。偶然について詩人がこう

言っている。「もし私が抽籤券を一枚も持つてゐなかつたならば、どんな番号が抽籤函から出て来ようかと私に何の関わりがあらうか。私はこの出来事に対して、『感性を賦与されて』ゐないのである。私にとつて籤運といふやうなものは存在せず、番号を抜き出す際の一律なやりかたとその結果の大違ひとのコントラストも全く存在しない。されば人間とその期待とを取除いて見給へ、貝殻も小石も、すべては見分けがたい様相を呈する。しかし偶然はこの世に何一つ作りはしない、——ただおのれを注目せしめるだけだ……」(ヴァレリー「人と貝殻」齋藤磯雄訳)。この「貝殻も小石も、すべては見分けがたい様相」は、たかだか宝くじを買ったくらいで見出しうる偶然性の様相などよりも、「驚くべき」様相ではないか。宝くじを買っていなければ、サイコロを振って一の目が八回連続して出るとほぼ同じ確率で一等もしくは二等をもたらしてくれる驚くべき「僥倖」も問題にはならないのだ。

——この世界に在るといふことが、それ自体、くじを引いてしまつてゐるといふことだとしたらどうか。引いたり引かなかつたりすることができず、すでに引いてしまつてゐるまことにその結果として自分がこの世に存在してゐるのだとしたら。そのくじが引かれてゐるかぎり、この世界から「人間とその期待」とを取り除くことなどできない。「人間とその期待」を取り除いてゐるかのように達観してみたがる「人間とその期待」が存在するだけだ。当人がどれほど傍観的に振舞おうとも、くじはずでにつねに引かれてゐる。宝くじやサイコロやルーレットのような狭義の賭博のみが問題ならば「なにか一種の順序のやうなもの」があるなどと言うのは正気の沙汰ではない。部外者には賭博者に通有の狂気としか見えないだらう。しかし、小説家が問題にしているのは、部外者のありえない生という広義のくじの方だ。

——宝くじなど買わずとも為さされている賭けがあるのなら、その「広義のくじ」に専念すればいいではないか。なぜ、わざわざ狭義のくじなど買う。どうして、狭いくじ引き場に自分を閉じ込めておいてから「広義のくじ」に思いを凝らす。「広義のくじ」を見えなくする現実があるからではないか。狭義のくじを引いてしか、世界の根底にある偶然性を感じさせない現実があるからではないか。ならば、その現実をどうして疑わない。さしあたり、くじに外れたという鼻先の貧乏くさい現実を見つめてみる。今回の年末ジャンボ宝くじ一枚あたりの期待値を求めれば百四十円（約四十七パーセント）前後だ。高額当選者が前年の三倍と言ってもこの期待値は例年とそう変わらない。しかも、この値は、掛け金の約五十三パーセントを胴元が回収するということを意味する。ちなみに、胴元の回収率は、パチンコが約三パーセント、公営競馬でも約二十五パーセントだから、五十パーセント以上回収する宝くじのようなジャンブルは法外で世界的に見ても珍しいのだ。そんなくじを引かせられているという現実をどうして直視しない。

——期待値と言うが、確率論は賭けをビジネスとして経営する側の理論ではありえても、運を賭ける側の理論にはなりえない。ビジネスとして経営する側の理論で見て、くじを買う者が馬鹿に見えるのは当然だ。確率論を否定するつもりはない。その有用性を否定するつもりもない。それは賭けを経営する胴元には確かだ有用な理論なのだろう。しかし、賭ける側には何ら確かな根拠を与えてはくれない。

——確率論が、賭博を経営する側の理論だからどうだというのか。もともと貿易や海上保険は一般にはジャンブルのようなものと理解されていた。保険がビジネスとして成立するのは十八世紀前後、

ルーレットが生まれたのは十七世紀、そして、パスカルやフェルマーが確率論を創始したのが十七世紀。確率論的な計算を前提としなければ保険もルーレットもビジネスとして成り立たなかっただろう。賭博が単に遊びとしてあったことと、遊びの提供がビジネスとして成立したことは区別しなければならぬ。考えてみれば、十七世紀になるまで確率論が発明されなかったということは不思議なことだ。サイコロを振って出る目の蓋然性が等しく六分の一だとは自明すぎる理屈だが、なぜこんな自明の理が十七世紀になるまで公理となりえなかったのか。賭けや偶然性が古代や中世になかったわけがない。それらをめぐって確率論を考えても不思議ではないアリストテレスのような人もいた。パスカルやフェルマーのような叡智に欠けていたわけではないのだ。いや、もし彼らが古代に生まれていたら彼らの叡智も確率論を考え出せなかっただろう。古代や中世の人々は賭けや偶然性について僕らと全く別様の考えを持っていたにちがいない。サイコロを振って一の目が出る確率も六の目が出る確率も等しく六分の一だと言われても何のことか分らなかったのではないか。だいたい、僕らはなぜ、それが等しく六分の一だと考える。蓋然性の空間が均質だというこの考えはどこから来たか。パスカルは、宇宙空間を前に畏怖しつつ「私はどうしてここにいるあそこにはいないのか」と自問した。この問いは「こととあそこが交換できるような均質な空間、近代物理学の空間」が前提にならなければ生まれようがない（柄谷行人「文体について」）。では、そのような空間はなぜ十七世紀になるまで成立しなかったのか。賭博は「プロテストантиズムの倫理」には反しても「資本主義の精神」とは矛盾しなかったのか。賭博の結果は資本のもとに確実に還流する。お望みなら、蓋然性の均質空間のグリッドは、資本が偶然性を蓋然性として回収していく過程において組み立てられたと考えてもいい。確率論が、賭け

をビジネスとして経営する側の理論にすぎないと言われても何も驚きはしない。だが、そこから全体的に見れば、賭ける者が個人的にどんな「確信」どんな「心理的な錯覚」を抱こうが、現実には確実にシステムに回収されているということはどう考えるのか。

——確率論が資本主義の鬼子なら、その鬼子を踏まえて、賭博者がシステムに回収されていると指摘するその理屈と立場もすでに同じシステムからめとられてしまっているということにはならないか。罠にかかった虎が、同じ罠に嵌った鹿を笑っているようなものだ。

A なぜ私を殺す？（そちらが優勢なのに。私には武器がないというのに。）

B お前は川の向こう側に住んでいるではないか。もしお前がこちら側に住んでいたとしたら、私は人殺しということになる、お前をこんなふうに殺すのは正しくない。だが、お前は、向こう側に住んでいる以上、私は勇士であり、こうすることが正義なのだ。

こんな対話を思いついたとき、パスカルは戦争という社会的空間においても「私はどうしてここにいるあそこにはいないのか」と考えていた。Aは、あそこに住んでいてここに住んでいないことのゆえに殺される。だから、自問するだろう、「私はどうしてあそこにいるここにはいないのか」と。Bもまた、自分がここに住んでいてあそこに住んでいないがゆえに、あそこに住んでいてここに住んでいないAを「正当に」殺す。だから自問するかもしれない、「私はどうしてここにいるあそこにはいないのか」と。Aの自問に対してもBの自問に対しても理由らしい理由は見つからない。川がたまたまそこ

を流れていただけなのだ。「私はどうしてここにおいてあそこにいないのか」と問わせているものはこの「たまたま」という浮動的な偶然性なのだ。

——迂遠に風呂敷を広げて、自分が日本においてアフガニスタンにいないのも同じ「浮動的な偶然性」のためだから宝くじを買ったのだと強弁しようというのか。しかし、BがAを殺すことが「正義」として認められるのも、ほかでもないその「浮動的な偶然性」のためではないか。どんな大義のためでもない。ただ、たまたまBがこちらにおり、たまたまAがあちらにいるからにすぎない。パスカルの対話が示しているのはそういうことだ。今日、ブッシュが、またビン・ラディンが自らの「正義」を主張し相手をテロリスト（人殺し）と呼ぶとき、彼らの主張を飾る大義名分を根こそぎ取り除けば、そこには同じ光景が眺められないか。たしかに、十七世紀以降、戦争は進化を続け、今や、戦争であろうとなかろうと「新しい」という形容のもとに戦争と呼びうるほどに複雑化した二十一世紀である。しかし、根底において何が変わったのか。ただ「川」が別のところを流れているだけなのではないか。ならば、ただ「浮動的な偶然性」を認識するに止まるだけだと、それは「人殺し」を「正義」とする考えに口実を与えることになりかねない。

——AもBもともに同じ罫に落ちた虎と鹿だと言っているのだ。十七世紀以前には「私はどうしてここにおいてあそこにいないのか」という問い自体が生まれえなかったように、たまたまBがこちらにおり、たまたまAがあちらにいるからというそれだけの理由でBがAを殺すことを「正義」として認めるといふ考えも、それ以前にはありえなかっただろう。ということとは、そのような「正義」の弁証を可能にする物理的な空間および蓋然性の空間は、恒久不変の条件というわけではなく歴史的な

ものであり、したがって歴史的に変換可能な罫だ、ということではないか。

——本気でそう思うのならば、大風呂敷をしまつて、宝くじに外れたという鼻先の「歴史的」現実を直視してはどうか。期待値が約百四十円の宝くじ一枚に三百円払うとはどういうことだ。かりに手数料を約五十円とすれば約百十円が胴元の収益ということになる。とは、二千三百十億円を売り捌けば、約八百四十億円の収益がある、ということだ。買う側の「夢」は不確定だが、売る側は、売りさえ立てば確実に儲かる採算になっているのである。むろん、収益分は公共事業費に当てられるが、不確定な「夢」と引き替えに確実に納税させられているようなものではないか。とりたてて何を生産するわけでもないのに高収益の期待できる、ビジネスとしてみれば、なかなか手堅くおいしい、あけすけに言えば、あこぎな商売だ。宝くじの販売が国や地方自治体に限定され、民間の個人や企業が宝くじを発売することを刑法が固く禁じているのがどういふことなのかよく考えてみる。宝くじにおいては、資本と国家がくじを確率的に管理して「蓋然性」のもとに偶然性、すなわち「広義のくじ」を隠蔽しながら確実に収益を上げている。そのために、狭義のくじを引いてしか世界の根底にきらめく「偶然性」を予感することもできないのだとしたら、宝くじを取り巻く制度そのものを疑わず、そのシステムを前提にしてそこに飼い馴らされた偶然性でアフガニスタンをどうのこうのと考えるのがどれほど馬鹿げた話かわかるだろう。情勢分析が愚劣なら宝くじも同程度に愚劣なのだ。

——裏返せば、「戦争」をめぐる情勢論が当たるのも、一の目を八回連続で出すようなもので一人の人間が一年間に交通事故で八百回以上死ぬよりも難しいということだ。おまけに、かりに当たってもシステム全体はびくともせず、むしろ確実に利益を積み上げていくところまで宝くじと似て

いる。つまり、対象となる構造が変換可能かと問わずになされる情勢分析は宝くじ的あまりに宝くじ的なのだ。そもそも、宝くじに妄想がからみついたのはそんな情勢論に対する当てつけからだった。その情勢論の愚劣さがこうして別途、証明されたとあれば、妄想は安心して退散することにしよう。

(二〇〇二年一月)